



## ルカ福音書2章

## イエスの誕生物語に、なぜ、羊飼いが出てくるのか？

ベツレヘム 羊飼いとみどりご

2017.8.15

migdal-eder

- ベツレヘムに「ミグダリエデル」がある  
(羊の群羊の塔) 創135:21 ミカ4:8  
ラケル死  
ルベツ
- 2700年史の史的には、  
ミグダリエデルは、神殿で羊飼いの子小羊を育てる。  
特別な扱いで、夜も番がある。  
品管管理して、傷のない羊を育てる忠実な羊飼いたる
- ダビデは、ベツレヘム生まれ(ボアズ・ルツ)で、羊飼いの、ミグダリエデルに居た。  
布に包まれて、食糧おけに寝てあそぶ...
- 生まれればかりの小羊は、傷がつかないように、はじめて布に包むという。

参考: 銘形牧師 "ミグダリエデル"

Migdal-Eder

ミカ4:8 - 5:2 ベツレヘムが5生まれ子  
マタイ2:6

クリスマスの時に幼子が生まれる、そのシーンはいろいろありますけれども、羊飼いが出てくる。羊飼いの絵が書いてあったり、羊飼いのストーリーを聞いたりすることがよくあると思います。でも、なぜ羊飼いが出てくるのでしょうか。羊飼いのシーンは、ルカ福音書の2章にありますけれど、その後羊飼いは出てきませんし、何の意味があつてここに羊飼いの話が出てくるんだらうと私も思っていましたし、皆さんも思っていたんじゃないかなと思います。

まずですね。イエス様が生まれたのがベツレヘムという町で生まれました。これもよく聞きますね。ベツレヘム、ベツレヘム。ベツレヘムの歌を歌ったりしますね。ベツレ



ヘムは、エルサレムに意外と近いんですね。大体これが10kmぐらいだそうです。エルサレムからベツレヘム。ですから、まあ普通に歩いて行ける。三鷹からだと同立ぐらいの距離のところにある。ベツレヘムでメサイアが生まれるということはミカの予言書で、ミカに言われてるんですね。「ベツレヘム、エフラテよ」エフラテ地方のベツレヘムみたいな感じですかね。「ベツレヘムよ、あなたはユダの氏族の中で最も小さい者だが、あなたの家から私のためにイスラエルの支配者になるものが出る。その出ることは昔から、永遠の昔からの定めである。」

この箇所があって、ベツレヘムで生まれますということが言われていたことが成就しますということで、ベツレヘムで生まれましたということになります。ベツレヘムという町はどういう町なのでしょう。誰を、どのシーンを想像するのでしょうか。

ベツレヘムと言った時に一番最初に想像するのはルツ記のはずです。ベツレヘム出の祭司がエルカナ。エルカナがベツレヘム。ベツレヘムというのは、ベツが家で、レヘムがパンという意味ですから、パンの家という名前なのに、そこがパンが無くなってモアブの地に行っていて、ベツレヘムにパンが戻ったよみたいな話を聞いて出身地に戻ってくるというベツレヘムの話ですね。ベツレヘム人ボアズが出てきて、ルツが結婚して、そこからエッサイが生まれて、ダビデが生まれてくるというベツレヘムの最初の話はルツ記。ルツ記はダビデのお母さんの話という感じですね。ダビデはこの人からこのお母さんから生まれたというようなストーリーになっていると思います。エッサイの仕事は何だったのかはよく分かりませんが、羊飼いをしていますよね。ダビデはそのお父さんの羊を面倒を見ているという事で、ベツレヘムにいて王様と話をしたりしていますから、多分お金持ちだったんでしょうね。力のある人物だったと思われます。ただ貧しい羊飼いな話じゃないですね。そこでベツレヘムで羊を飼っていますということですので、今度ダビデを思い出さず。「ダビデの町で生まれました」ということを言われるんですけど、ダビデの町と言った時には、シオンはダビデの町と言ったりしますが、このベツレヘムもこの辺りではダビデの町と呼ばれていたようですね。ダビデの生まれた場所がダビデの出身地ということですよ。

そのベツレヘムに大切な場所があるんです。それが羊飼いが出てくるヒントになるものですが、ミカ書で、「ベツレヘムで生まれます」と言われる少し前のところですね。4章の7節から「主はシオンの山で今よりとこしえまでも彼らの王となる。羊の群れのやぐら、シオンの娘の丘よ。あなたに以前の主権エルサレムの娘の王国に帰ってくる。」この羊の群れのやぐらという訳になっていますけれど、羊の群れのやぐらという名前の場所。場所の名前は訳せばいいのか、カタカナで言えばいいのかは翻訳によるということですが、意味としては「羊の群れのやぐら」という意味なんです。場所の名前として「ミグダルエデル」という場所があります。ミグダルエデルという場所は最初に出てくるのがラケルの話ですね。ラケルが死んだ時、創世記35章21節「ラケルは死んで彼女はエフラテ、今日のベツレヘムへの道に葬られた」というエルサレムからベツレヘムに行く途中の道ということだと思います。ですから、この間の所ベツレヘムあたりの近くに葬られたということですね。そこから旅を続けてミグダルエデルの彼方に天幕を張ったという書き方がありますが、ミグダルエデルというのがクロスリファレンスにあります。ミカ4章8節。このミグダルエデルというのが、「羊の群れのやぐら」という意味の場所の名前なんです。ミグダルが「塔」で、エデルが「群れ」。群れと言った時には「羊の」という意味が入っているんだと思いますけど、「羊の群れの塔」という場所の名前です。今はもうなくなっているようですが、ベツレヘムと言っている場所の近郊なのか、ベツレヘム地域の端っこなのかには塔があるんですね。塔があって羊を放牧する。それを見張っている場所ということみたいです。その名前があり

ますから、多分このミグダルエデルという塔ですね。塔がある場所は、羊を育てるのに非常に良い場所ということなんだろうと思います。

ベツレヘムで羊の群れの塔ですから、ダビデはダビデが羊飼いをしていた時に、もちろん知っている場所と。またビデが羊飼いをしていた場所のような事を連想できるような場所というのがこのミグダルエデルというものです。ミグダルエデルについては、聖書の中にもう一か所あったかなと。この2箇所かな。このミカの箇所とラケルのところで。ラケルの時にもミグダルエデルと言われてますから、ダビデより前の時代にも羊を飼うのに適した場所ということだったんだと思います。エッサイがそこにて羊飼いをしている。聖書の中には書いてないんですけど、それは確かに妥当だよねと思われるのは、このエルサレムの近郊で、これが10キロぐらいですから、エルサレムで捧げられるにえの供給場所。その意味ではブランド羊、ベツレヘム羊、ミグダルエデル羊みたいなダビデ印の羊みたいなものだと思うのです。その羊がエルサレムで過ぎ越しのいけにえをささげる時に、ベツレヘムからミグダルエデルで育てられてた羊が捧げられている。捧げものとしてつかわれていたと。それは伝統的にそのようなことを言われているようです。証拠があるわけではないんですけど。この生まれた子羊を見に行くわけですね。このミグダルエデルの羊飼いたちなんだと思いますが、1kmぐらいしか離れてないんでしょうね。ベツレヘムの中心地とかから1kmぐらい。10分、15分ぐらいしか離れていないような所の羊飼いが、その飼葉桶で寝ておられるみどりごを見つける。飼葉桶に寝ておられるみどりごなんですけど、布にくるまれて寝てますよね。布にくるまれて草が敷いてあるところに、布に包まれて寝ているみどりご。この地域の文化的な背景をこれから考古学とかがもっと進んでいくとはっきりするのもかもしれませんが、赤ちゃんが生まれた時に布にくるむというのは、エゼキエルに書いてあったりします。もう一つは書いていませんけど、誰かが言ったことで証拠があるわけじゃないんですけど、生まれたばかりの羊がいけにえとして捧げられますから、品質管理として生まれて一週間とかは産着、布にくるんで大切にしているということをしていたということがあろう。ですから、この飼葉桶に寝ている布にくるまっている子羊。過ぎ越しのいけにえとして捧げられる子羊のようなものとして、羊飼いたちが見ると。まさにこれは、捧げられる子羊にふさわしいものだというのを御使いたちに言われて、驚きながら神を賛美するというこのミグダルエデルの羊飼いたちが、過ぎ越しの子羊、過ぎ越しのいけにえの子羊のような姿でいる赤ちゃんを見ているというのが、ミグダルエデル、羊の群れの塔からベツレヘムに見に来ている羊飼いたちというシーンで、連想すべきものということのようです。ミグダルエデルについては、北海道の空知太教会の銘形牧師のページにもっと詳しく書いてありますので、ミグダルエデルでgoogleで検索すると出てきますから参考にしてください。

次が、飼葉桶に寝ているということなんですけど、冬じゃないとか、秋ぐらいじゃないとか、外の馬小屋で生まれましたとかという話があるのですが、あれは間違っていますということの中東の「中東文化の目を見たイエス」で、ケネスベイリーさんが言っています。この人はアメリカ人ですけど、40年ぐらい中東に住んで、中東の文化をすごくよくわかってる人が福音書や、その背景についてたとえ話とかいろいろなことについて教えてくれる本があって、その中に当時の家はこういう形でしたということ。イエス誕生の物語という話が説明されている箇所があります。それを見ると(家の図)、これが横から見た家で、これが上から見た家。ダビデの町で、ダビデの家系の人があるわけですから親戚がいっぱいいる場所。その人たちでホテルがあるわけじゃないですから、親戚の家に泊まらせてもらう。なおかつ身重の人ですから「お前ら外に行け」みたいなそんなひどい文化なわけじゃないでしょという話もしてくれています。家



がこういう形をしていて、夜になると羊たちがここに入れられるんですね。屋内畜舎と書いてあります。ちょっと下がっているみたいですね。ここが階段なっていたりするんで、ここに夜は家畜が入って、ここに飼い葉桶があつて食べますというこの場所ですね。リビングルーム、ワンルームみたいな感じみたいです。ここに泊まっていた。ここに赤ちゃんがいる。では、宿屋というのは何かというのをまた説明してくれますけど、「カタリュウマ」というのかな、それは宿屋の話じゃなくて客間です。客間と家族用の場所があつて、ここに飼い葉桶があります。住民登録のために来ていますから人がいっぱい来てるわけでしょう。それで客間がいっぱいになっていますということなので、この家族用の所に泊まりました。「泊っていた時に」と言っていますから、急に陣痛が起きてホテルを探しての話でもないんですね。ここに泊まってここで生まれましたというこの飼い葉桶です。飼い葉桶で寝ているみどりごを見つけるというのは、こういうシーンなのですね。それで羊飼いが出てくると言った時に、過ぎ越しのいけにえとしての羊を見ているという話なのです。次に、じゃあこの羊飼いたちが、ミグダルエデルから来た羊飼いたちが子羊を見ているというシーンは、この後どう展開するものなのか。そこまで大切な、生まれ方がすごく細いでしょう。生まれるところの説明が長いし細いんですね。ということはこの後何か関連する話が出てくるはずだということなんですけど、その話を見るためには、今度ミグダルエデルが、まだしつこくもう1回登場するんです。



それはどこかという、羊飼いはないんです。マグダラのマリアです。マグダラのマリアという人が現れますよね。マグダラ、マグダラ、マグダラと何度も何度も言われて、いろんなマリア、ミリアムですけど、マリアだらけでしょう。福音書の中で、その中でこの人は何とかのマリア、何とかのマリアなんですけど、このマグダラのマリアという人が大切な人物として出てきます。このマグダラというのは、これはアラム語なんですね。これをヘブライ語で言うとミグダルです。ミグダルとマグダラと同じ。マグダラのマリアはベツレヘムじゃないんですね。

今度はガリラヤのここにマグダラとあります。「ミグダル」と今現在googleマップで検索するとこっち(ガリラヤのマグダラ)ができます。マグダラ、ミグダルと書いてあります。これは何の塔なのか。ミグダルは塔です。ミグダルエデルなんですけど、ガリラヤ

湖の隣は魚を見張る塔がここ(ガリラヤ湖)にあったということのようです。魚の産地なんですね。

ガリラヤ湖、ブランド魚だったんですね。干物にしたり何かして結構栄えていたようです。その場所のマリア、マグダラのマリアは、魚の塔のマリアということで、旧約時代の最後の塔を見ている人達は「羊」、新しい時代の最初の塔は「魚」という塔の見張っているものが違ってはいますが、このマグダラのマリアというのは魚の塔の方です。そうするとマグダラのマリアの話とミグダレエデルの羊飼いの話、これは似てる話なのかと言って比べてみていくと、そうすると、あらら、あららといろんな箇所が出てきて、いろんな共通ポイントがあって、イエス様が生まれたという話と、復活するという話はすごく似てるんですね。復活、全ての新しく生まれるということを話してるんだと。生まれる箇所は、処女から生まれるとか、御使いが現れて栄光が現されるとか、布にくるまってる飼葉おけに寝るとか、乳香没薬を持ってくる人がいるとか。たくさん誕生のストーリーで聞いたことがあることがあります。復活のストーリーの方も聞いたことがあることがいっぱいあると思います。これを一緒に見ていくと、そういうことなんだねってわかる。「処女から生まれました。誰も葬られたことのない墓から復活しました。」みたいなことがありますけど、その中の一つとして、ミグダレエデルの羊飼いたちが、夜番の後ですからね。夜明け朝早く、まだ暗いうちにマグダラのマリアは墓に行く。夜番をしていた羊飼いの人たちが、急いでイエスを見に行く。そうすると「布にくるまって、寝てる。」「布にくるまって寝ているはずの場所に布しかない。」というようなシーンとして、並行してる所がたくさんあります。

ですから、なるほど、このイエスの誕生について詳しく説明しているのは、「新しく生まれる」「復活する」ということの予言的なものとして書かれていて、それで、そういうことをこの時にいたマリアは心に留めているみたいということですので、このストーリーも一緒に考えて自分で確かめてみてくださいね。という中で出てくるベツレヘム、ミグダレエデル、マグダラのマリア、こういう繋がりがあるので、なるほど、この羊飼いが、過ぎ越しのいけにえとなったわけですからね。

過ぎ越しのいけにえとして捧げられたイエス様の十字架と、過ぎ越しのいけにえとして生まれてきたそのみどりご。この話がタイポロジーみたいなことを言ったりしますが、「こっちは雛形になったのはこのためだったんだね」っていうことを見るように、このストーリーが書かれてることなので、羊飼いが出てくるということです。